英語9　文法事項や言語の働きなどを理解して正確に書く

9

（1）次の①、②について、例を参考にしながら、必要があれば（　）内の語を適切な形に変えたり、不足している語を補ったりして、それぞれ会話が成り立つように英文を完成させなさい。

（例）＜友達同士の会話＞

A：I called you at eight last night.

B：Oh, sorry. I（　　do　　）my homework then.

〔答え〕was doing

①　＜先生と生徒の会話＞

A：Do you have any plans for summer vacation?

B：Yes. I（　　visit　　）my uncle in London.
I can't wait!

A：Wow, that's nice!

②　＜友達同士の会話＞

A：Oh, you have a new watch!

B：Yes, I got it yesterday.

A：（　　buy　　）the watch?

B：At a department store near the station.

（2）次の英文は、ある生徒が文書作成ソフトを使って、スピーチコンテスト（speech contest）についてスミス先生（Mr. Smith）宛てに書いた【メール文の下書きの一部】です。送信する前に友達に相談したところ、友達から【コメント】をもらいました。【コメント】にしたがって、下線部を書き直しなさい。

【メール文の下書きの一部】

Dear Mr. Smith,

How are you?

We have a speech contest next Friday.
The speech contest starts at 10:00.
You have to come to the speech contest.

【コメント】

この英文は、依頼する表現に修正したほうがよいと思う。

出題の趣旨

文法事項や言語の働きなどを理解して正確に書くことができるかどうかをみる。

正確に書くためには、音声や語彙、表現、文法や言語の働きなどを理解するとともに、これらの知識を、書くことによる実際のコミュニケーションにおいて活用できる技能を身に付けておくことが重要である。本問は、文構造や文法事項、言語の働きなどの知識を活用し、正しい語順で文を構成することや、伝えたいことについての情報を正確に書くことができるかどうかを把握することをねらいとしている。

設問（1）は、与えられた英語を適切な形に変えたり、不足している語を補ったりして、会話が成り立つように英文を完成させる問題である。設問（1）① では、未来表現（be going to）の肯定文を正確に書くことができるかどうかを把握するために出題した。設問（1）② では、疑問詞を用いた一般動詞の２人称単数過去形の疑問文を正確に書くことができるかどうかを把握するために出題した。

設問（2）は、メールの英文を依頼する表現に書き換える問題である。コミュニケーションを行う目的や場面、状況等に応じて表現を使い分けるためには、そのための表現を理解しておく必要がある。ここでは、「相手の行動を促す」という言語の働きを理解し、依頼する表現を正確に書くことができるかどうかを把握するために出題した。

設問（１）①

趣旨

未来表現（be going to）の肯定文を正確に書くことができるかどうかをみる。

■学習指導要領における領域・内容

書くこと

ア　関心のある事柄について、簡単な語句や文を用いて正確に書くことができるようにする。

内容（1）英語の特徴やきまりに関する事項

イ　符号

ウ　語、連語及び慣用表現

エ　文、文構造及び文法事項

１．解答類型と反応率

問題番号		解答類型		反応率（%）	正答
9	(1)①	1	未来表現（be going to）の肯定文を正確に書いているもの （正答例） ・am going to visit	19.3	◎
		2	未来表現（be going to 以外）の肯定文を正確に書いているもの （正答例） ・will visit	20.5	○
		3	未来表現の肯定文を書いているが、大文字・小文字の書き分け等に誤りがあるもの （正答例） ・Am going to visit / Will visit	1.5	○
		4	未来表現の肯定文を書いているが、誤りがあるもの	1.8	
		5	未来表現以外の肯定文を書いているもの	22.4	
		6	類型５までとは異なる肯定文を書いているもの	26.8	
		7	肯定文を書いていないもの	0.7	
		99	上記以外の解答	0.6	
		0	無解答	6.5	
			正答率	41.2	

２．分析結果と課題

○　正答率は 41. 2％である。未来表現（be going to）の肯定文を正確に書くことに課題がある。解答類型５、６の反応率が高いことから、特に、会話の流れを理解することや、基本的な語や文法事項等を理解して正確に文を書くことに課題が見られる。

○　解答類型４の具体的な例としては、以下のようなものがある。

（例）
・will be visit
・am going visit

このように解答した生徒は、会話の流れから時制を判断し、未来表現の肯定文を書くことは理解しているが、基本的な語や文法事項等を理解して正確に文を書くことに課題があると考えられる。

○　解答類型５の具体的な例としては、以下のようなものがある。

（例）
・can visit
・visited
・visit

このように解答した生徒は、会話の流れから肯定文を書くことは理解しているが、時制を正しく判断して文を書くことに課題があると考えられる。

○　解答類型６の具体的な例としては、以下のようなものがある。

（例）
・am visit
・visiting
・going to

このように解答した生徒は、会話の流れから肯定文を書くことは理解しているが、基本的な語や文法事項等を理解して正確に文を書くことに課題がある、または問題の指示文を正しく理解できていないと考えられる。

設問（１）②

趣旨

疑問詞を用いた一般動詞の２人称単数過去形の疑問文を正確に書くことができるかどうかをみる。

■学習指導要領における領域・内容

書くこと

ア　関心のある事柄について、簡単な語句や文を用いて正確に書くことができるようにする。

内容（1）英語の特徴やきまりに関する事項

イ　符号

ウ　語、連語及び慣用表現

エ　文、文構造及び文法事項

１．解答類型と反応率

問題番号			解答類型	反応率（%）	正答
9	(1)②	1	疑問詞 where を用いて一般動詞の２人称単数過去形の疑問文を正確に書いているもの （正答例） ・Where did you buy	21.1	◎
		2	疑問詞 where を用いて一般動詞の２人称単数過去形の疑問文を書いているが、大文字・小文字の書き分け等に誤りがあるもの （正答例） ・where did you buy	0.7	○
		3	疑問詞 where を用いて一般動詞の２人称単数過去形の疑問文を書いているが、誤りがあるもの	1.3	
		4	疑問詞 where を用いているが、一般動詞の２人称単数過去形以外の疑問文を書いているもの	30.0	
		5	類型４までとは異なる疑問文を書いているもの	10.2	
		6	疑問文を書いていないもの	24.5	
		99	上記以外の解答	1.5	
		0	無解答	10.7	
			正答率	21.8	

２．分析結果と課題

○　正答率は 21.8%である。疑問詞を用いた一般動詞の２人称単数過去形の疑問文を正確に書くことに課題がある。特に、解答類型４、６の反応率が高いことから、一般動詞の疑問文を正確に書くことに課題が見られる。

○　解答類型３の具体的な例としては、以下のようなものがある。

（例）
・Where did you bought

このように解答した生徒は、会話の流れから時制を判断し、疑問詞 where を用いて一般動詞の２人称単数過去形の疑問文を書いているが、基本的な語や文法事項等を理解して一般動詞の疑問文を書くことに課題があると考えられる。

○　解答類型４の具体的な例としては、以下のようなものがある。

（例）
・Where do you buy
・Where bought
・Where were you buy

このように解答した生徒は、会話の流れから疑問詞 where を用いて書くことは理解しているが、時制を正しく判断することができていないか、基本的な語や文法事項等を理解して一般動詞の疑問文を書くことに課題があると考えられる。

○　解答類型５の具体的な例としては、以下のようなものがある。

（例）
・Do you buy
・Are you buy
・Did you

このように解答した生徒は、会話の流れから疑問文を書くことは理解しているが、疑問詞 where を用いて一般動詞の疑問文を書くことを理解していない、基本的な語や文法事項等を理解して正確に一般動詞の疑問文を書くことに課題がある、または問題の指示文を正しく理解できていないと考えられる。

○　解答類型６の具体的な例としては、以下のようなものがある。

（例）
・It’s buy
・buy
・bought

このように解答した生徒は、会話の流れから疑問文を書くことを理解できていないと考えられる。

○　解答類型０に該当する生徒は、会話の内容を理解できていないか、基本的な語や文法事項等の知識が身に付いていないため、解答することができていないと考えられる。

３．学習指導に当たって［対応設問：（１）①、②］

場面や状況から文の形式や時制を適切に判断し、正確に書くことができるようにする

場面や状況に応じて正確に英文を書くためには、文脈から適切な文の形式や時制を判断することが大切である。その上で、意味内容の伝達のみにとどまるのではなく、生徒自身が英語表現の誤りに気付き、修正を加えながら正確さを高めていくことが必要である。

指導に当たっては、以下のような学習活動に取り組むことが考えられる。

- 文脈に応じて理解した文法事項を正しく活用したり、活用することを通して文法事項を理解したりする活動
- 書いた英文が相手に正しく伝わるかどうかについて、生徒自身が読み直して誤りを修正したり、ペアでチェックし合ったりして正確な英文に書き直す活動

特に、大問９（１）② においては疑問文についての理解が不十分であることがうかがえる。疑問文を実際のコミュニケーションにおいて正しく活用できるまでには時間を要するため、疑問文を用いて話したり書いたりすることを、３年間を通じて継続的に行うことが大切である。例えば、教師が用意した質問で言語活動を始めるのではなく、生徒自身が教師や外国語指導助手（ALT）に質問する場面や生徒同士で質問し合う場面を設定したり、自分が質問したことを書き出して正しく書くことができているか確認したりするなど、適宜正確さを高める指導を行うことが大切である。

（参照）
「平成 31 年度（令和元年度）【中学校】授業アイディア例」pp. 19−20
https://www.nier.go.jp/jugyourei/h31/data/19m.pdf

関連のある文法事項をまとめて整理し、正確に書くことができるようにする

既習の文法事項を適切に使い分けられるようになるためには、関連のある文法事項をまとめて整理し、使い方の理解を深めることが大切である。その上で、再び意味のある文脈の中でより適切な表現を選択して活用することも大切である。例えば、大問９（１）① においては、会話の流れから未来表現を用いて書くことを理解した上で、会話をしている時点からみてこれから先のことを表す未来表現（will）よりも、すでに予定されていることを表す未来表現（be going to）を用いて書く方がより適切であると判断する必要がある。

指導に当たっては、以下のような学習活動に取り組むことが考えられる。

- 既習の文法事項と新しく学んだ文法事項とを比較し、共通点や相違点を考える活動
- 意味のある文脈を設定し、適切な表現を選択して書く活動

学習活動を行うに当たっては、現在形や過去形を学習した後、時制として整理したり、to 不定詞や関係代名詞などを修飾という側面から整理したりするなど、関連のある文法事項については、より大きく分類して整理して理解することが必要である。

（参照）
「平成 31 年度（令和元年度）【中学校英語】指導事例集（指導資料）」pp. 1−7
https://www.nier.go.jp/kaihatsu/shidousiryou/eigo/pdf/eigo_Case01.pdf
「平成 31 年度（令和元年度）【中学校英語】指導事例集（映像資料）」
https://www.youtube.com/watch?v=Prq1JLSl_a8&list=PLGpGsGZ3lmbAbGfZZwU97FF58qfuBTUxC&index=2

設問（２）

趣旨

「相手の行動を促す」という言語の働きを理解し、依頼する表現を正確に書くことができるかどうかをみる。

■学習指導要領における領域・内容

書くこと

ア　関心のある事柄について、簡単な語句や文を用いて正確に書くことができるようにする。

内容（1）英語の特徴やきまりに関する事項

イ　符号

ウ　語、連語及び慣用表現

エ　文、文構造及び文法事項

（3）言語活動及び言語の働きに関する事項

②　言語の働きに関する事項

イ　言語の働きの例

（オ）相手の行動を促す

１．解答類型と反応率

問題番号		解答類型		反応率（%）	正答
9	(2)	1	「相手の行動を促す」という言語の働きを理解し、依頼する表現を正確に書いているもの （正答例） ・Can you come to the speech contest? ・Could you come to the speech contest? ・Will you come to the speech contest, please?	17.1	◎
		2	「相手の行動を促す」という言語の働きを理解しているが、命令文を用いた表現となっているもの（please を文頭に用いているもの） （正答例） ・Please come to the speech contest.	9.1	○
		3	依頼する表現を書いているが、大文字・小文字の書き分け等に誤りがあるもの （正答例） ・can you come to the speech contest?	3.6	○
		4	依頼する表現を書いているが、誤りがあるもの	9.2	
		5	類型４までとは異なる誤りがあるもの	36.5	
		99	上記以外の解答	0.5	
		0	無解答	24.0	
			正答率	29.7	

２．分析結果と課題

○　正答率は 29.7％である。「相手の行動を促す」という言語の働きを理解し、依頼する表現を正確に書くことに課題がある。特に、解答類型５の反応率が高いことから、「相手の行動を促す」という言語の働きを理解しておらず、依頼する表現が身に付いていないことが考えられる。

○　解答類型４の具体的な例としては、以下のようなものがある。

（例）
・Could you have to come to the speech contest?
・Please you have to come to the speech contest.

このように解答した生徒は、「相手の行動を促す」という言語の働きを理解し、依頼する表現を書いているが、基本的な語や文法事項等を理解して正確に文を書くことに課題があると考えられる。

○　解答類型５の具体的な例としては、以下のようなものがある。

（例）
・Have you come to the speech contest?
・You want to come to the speech contest.

このように解答した生徒は、依頼する表現以外の疑問文になっているなど、「相手の行動を促す」という言語の働きを理解して依頼する表現を書くことができていないと考えられる。または、依頼する英文に書き直すという状況を理解できていないと考えられる。

○　解答類型０に該当する生徒は、問題の趣旨を理解できていないか、基本的な語や文法事項等の知識が身に付いていないため、解答することができていないと考えられる。

３．学習指導に当たって

言語の働きを理解し、場面や状況に応じて表現を使い分けることができるようにする

言語の働きを理解し、場面や状況に応じて表現を使い分けるためには、言語の使用場面やコミュニケーションを行う相手との関係性を意識し、場面や状況に応じた適切な表現を選択することが重要である。

指導に当たっては、以下のような学習活動に取り組むことが考えられる。

- 教科書における登場人物の設定を変更し、適切な表現や言い方に直して音読する活動
- 「親しい生徒同士」や「生徒と姉妹都市の市長」といった関係性の異なる相手を複数設定し、それぞれにおけるロールプレイを比較しながら表現を使い分ける活動
- 既習の表現を同じ言語の働きごとに分類したり、同じ言語の働きをもつ表現同士を比較して相違点を考えたりする活動
- 中学校国語科第２学年において「相手の行動を促す」という言葉の働きを扱っていることを踏まえ、国語科の指導と関連付けて言語の働きを理解し、英語における「相手の行動を促す」という言語の働きを類推する活動

学習活動を行うに当たっては、実際のコミュニケーションにおいて複数の表現を取り上げた上で、使用した表現を共有し、分類や比較を通して表現がもつ言語の働きを考えることが大切

である。また、理解した言語の働きを別の文脈においても活用できるようにするために、異なる場面や状況を設定して、同じ言語の働きをもつ表現を使い分ける活動を繰り返し行うことが考えられる。

授業アイディア例

「言語の働きを理解し、場面や状況に応じて表現を使い分ける力を育成するための学習過程」

1．コミュニケーションを行う目的や場面、状況等を把握し、言語活動に取り組む → 2．分類や比較を通して表現の違いを理解する → 3．意味のある文脈の中で、言語の働きを理解し、表現を使い分ける → 4．学んだことを他の場面や状況で活用する

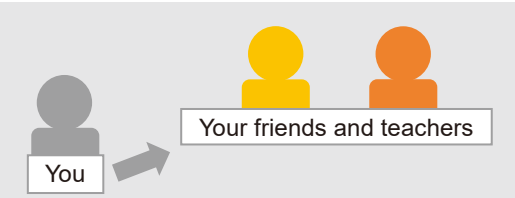
1．コミュニケーションを行う目的や場面、状況等を把握し、言語活動に取り組む

Schedule

Date: Friday, October 6

Time: From 10:00 a.m.

Place: Nagisa Hall



This is the schedule of an English speech contest. You are going to make a speech there. I hope you ask your friends and your teachers to come. What will you say? Now, talk with your partner about how to ask them.

教師

ポイント 「友達や先生に対して、スピーチコンテストに来てもらえるように依頼する」という目的や場面、状況等を把握し、見通しをもって言語活動に取り組むことが大切です。

2．分類や比較を通して表現の違いを理解する

What did you say? Write your phrases on the whiteboard in your computer. Then, share your ideas in your groups.

(1) グループ内で表現を共有し、それぞれの表現の違いを検討する。

《1人1台端末の共同編集ホワイトボード機能》

friends	teachers
Hey, come to the speech contest.	Could you come to the speech contest?
Come to the speech contest, please.	Can you come to the speech contest?

Please come to the speech contest.

“Come to ~.”から始まる表現は少し命令されているように感じたかな。友達同士であれば、違和感はないけれども。

“Please ~.”だと来てもらうことが前提になっていないかな。疑問文の表現で言われた方が、先約があったとき No.って返答しやすくて助かるな。

(2) 全体で考えを共有し、状況に応じた適切な表現があることを理解する。

You may use the expressions on the left when talking with your friends. You could use the expressions on the right when talking with teachers. Let's check them in your textbook.

ALT

3. 意味のある文脈の中で、言語の働きを理解し、表現を使い分ける

The English Speech Contest

スピーチコンテストに出場する Hana が Smith 先生に話しかけています。

H: Excuse me, Mr. Smith. I'm going to make a speech next Friday at Nagisa Hall. Could you come to listen to my speech?

S: Next Friday? Let me see… Oh, sorry. I have an important meeting on the day.

H: I see.

S: But I want to help you to practice tomorrow. Can you come to the English room after school?

H: Sure. Thank you very much!

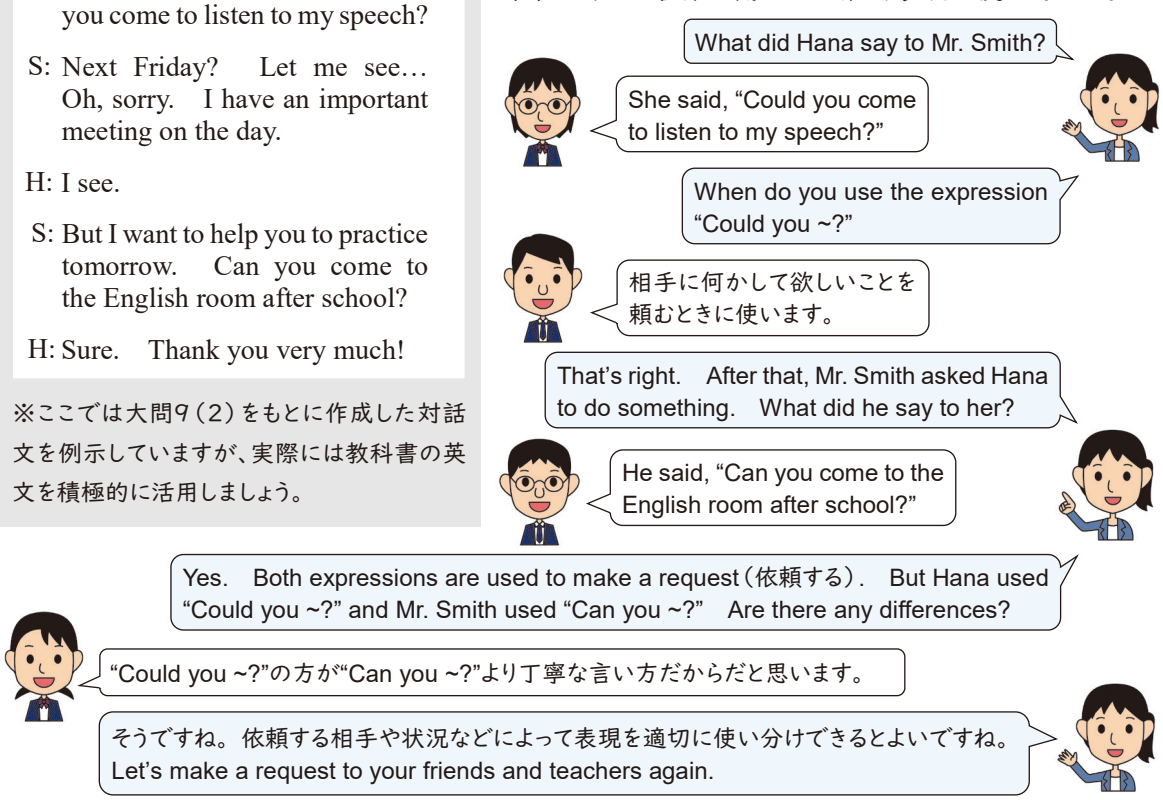
※ここでは大問9(2)をもとに作成した対話文を例示していますが、実際には教科書の英文を積極的に活用しましょう。

(1) 場面や状況を把握した上で、登場人物になりきって英文を音読する。

ポイント

- 音読をする際には、言語の使用場面やコミュニケーションを行う相手との関係性を意識することが大切です。
- 教科書における登場人物の設定を変えて音読することも考えられます。

(2) 文脈から言語の働きを理解し、表現を使い分ける。

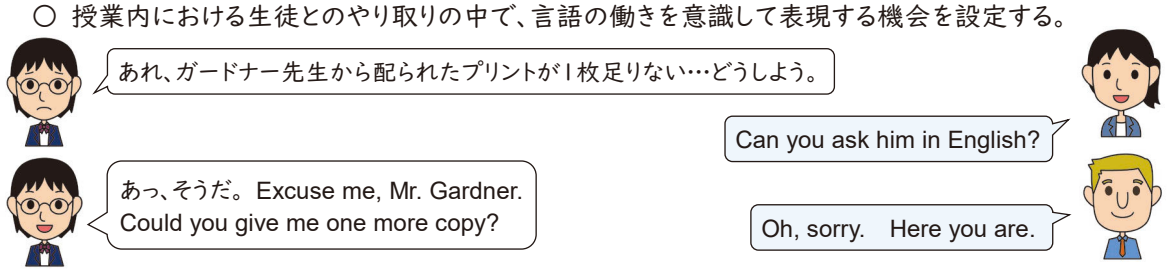


4. 学んだことを他の場面や状況で活用する

○ 他の場面や状況を設定する。

例①	イギリス人の友達にオススメの小説を尋ねる	You are in the library with your friend from the U.K. You want to ask her or him to recommend some English novels. What will you say?
例②	姉妹都市の市長にイベントへの参加を依頼する	You are writing an e-mail to the mayor of your city's sister city. You need to ask her or him to join the English events. What would you write?

○ 授業内における生徒とのやり取りの中で、言語の働きを意識して表現する機会を設定する。



【活用のポイント】

理解した言語の働きを別の文脈においても活用できるようにするために、次時では本時とは異なる場面や状況を設定して、同じ言語の働きをもつ表現を使い分ける活動を繰り返し行うことが大切です。

コラム④

【言語活動の充実のために、「言語の働き」を意識して指導する】

「言語の働き」については、中学校学習指導要領（平成 29 年告示）において、「②言語の働きに関する事項」に「言語活動を行うに当たり、主として次に示すような言語の使用場面や言語の働きを取り上げるようにする。」とあり、具体的には、「コミュニケーションを円滑にする」、「気持ちを伝える」、「事実・情報を伝える」、「考えや意図を伝える」、「相手の行動を促す」の五つに整理されています。それぞれの言語の働きは、「描写する」、「意見を言う」、「依頼する」などの形で示されています。

指導に当たっては、それぞれの言語の働きの特徴を理解させた上で、様々な言語活動を行うときに生徒が意識して活用できるようにします。例えば、She likes soccer. という文は、他者を紹介する場面であれば、事実や情報を説明していると考えられますが、友達同士で話している場面で、A: Let's watch a movie with Rachel. B: She likes soccer. とあれば、映画を観ることに反対していると考えることができます。また、自分の妹の誕生日に知人からプレゼントでサッカーボールをもらっている場面で、A: This is for her. B: She likes soccer! とあれば、お礼を言っていると捉えることもできます。このように、言語の使用場面とともに言語の働きを捉え、内容を理解したり表現したりすることは、コミュニケーションを図る資質・能力を育成するための言語活動の充実につながるものです。

大問９（２）では、依頼する表現として、“Can you ～?”、“Will you ～, please?”、“Could you ～?” など様々な表現が考えられます。まずは、設定した場面や状況にふさわしいと考えられる表現を生徒から複数引き出した上で、例えば「丁寧さ」を観点に、辞書を用いてそれぞれの表現を比べさせたり、外国語指導助手（ALT）の意見を参考に整理させたりするなどして、それぞれの表現の特徴や使用場面などについて理解するように指導することが大切です。そして、それらの表現を用いてロールプレイなどの活動を行う際には、場面や状況にふさわしく表現することができるよう音声面の指導も併せて行うことが効果的です。

また、「言語の働き」は各学校で設定している学年ごとの目標（いわゆる CAN-DO リスト形式による学習到達目標）とも親和性が高いものであると考えられます。例えば、「日本の伝統文化などについて、簡単な語句や文を用いて説明することができる」という学習到達目標があるとします。この場合、言語の働き「(ｳ) 事実・情報を伝える」の「説明する」に着目し、コミュニケーションを行う目的や場面、状況等に応じて、適切な表現を選択し、客観性や論理性を意識して事実や情報を有効に伝えることができるように指導することが重要です。

さらに、この五つの言語の働きについては、小学校、高等学校における分類との対応関係を分かりやすくするために統一が図られており、それぞれの校種との円滑な接続も期待されています。中学校では、小学校でどのような英語表現を使用しているかを把握した上で、コミュニケーションを行う目的や場面、状況等に応じて、多様な表現ができるように指導することを心掛けましょう。

なお、実際の言語の働きは、言語活動の中で複数の機能を同時に果たすこともあるので注意が必要です。